

パリ・ラ・ヴィレット建築学校と本学建築工学コースとの国際交流 日仏の建築文化の体験から見出される建築デザインの原点と意義



海外交流

木 多 道 宏*, 中 前 佐 和 子**

International Exchange between Ecole National Supérieure d' Architecture de Paris la Villette
and Department of Architectural Engineering, Osaka University
Basics and Significance of Architectural Design found through Experiences of
Architectural Culture in Japan and France

Key Words : architectural design, architectural culture, international exchange

1. はじめに

本学工学研究科と文学研究科は、パリ・ラ・ヴィレット建築学校（フランス、パリ）との交流協定を締結しており、筆者が所属する工学研究科建築工学コースは2005年より現在に至るまで、計18名のフランス人学生を受け入れ、計6名の日本人学生を派遣してきた（内1名は旧・環境工学専攻）。昨シーズン（2015年10月～2016年9月）はラヴィレット建築学校より3名が来日し、本学建築工学コースから1名の日本人が留学した。この1年間の取り組みを最新の成果として報告させていただきたい。2章のフランス人の活動状況は木多が取りまとめ、3章の日本人派遣の成果は、実際に留学してきた中前（木多研、M2）の執筆によるものである。



* Michihiro KITA

1964年10月生
大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻
(1990年)
現在、大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学部門 教授
建築計画・都市計画
TEL : 06-6879-7639
FAX : 06-6879-7641
E-mail : kita@arch.eng.osaka-u.ac.jp



** Sawako NAKAMAE

1990年4月生
大阪大学工学部地球総合工学科建築工学科目 (2014年)
現在、大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学コース 博士前期課程2年
TEL : 06-6879-7642
E-mail : sawako.nakamae@gmail.com

2. フランス人留学生の本学建築工学コースにおける活動報告（木多道宏）

昨シーズンに受け入れた3名はそれぞれ計画・デザイン系の研究室である横田研、阿部研、木多研に配属された。フランス人にとって、日本の現代建築やデザインの思考様式は非常に魅力的に映っており、日本の第一線で活躍する建築家が指導する設計演習「建築・都市デザインA」と「建築・都市デザインB」は特に人気の科目である。建築・都市デザインAでは、建築家・竹原義二先生より、がんを患う子どものための施設の設計が出題され、竹原先生ならではの地形と屋根が呼応する空間設計の醍醐味を体験しながら3名がそれぞれの作品を完成させた。また建築・都市デザインBには同済大学（中国、上海）との設計ワークショップが組み込まれており、上海の近代初期住居群と現代ビル群に挟まれた敷地に、膨大なボリュームの建築をいかに編成するかが問われた（写真1）。同済大学建築学科でも欧州を中心



写真1 同済大学との設計ワークショップ（フランス人留学生3名も参加、発表はカミューさん）

に多くの留学生が学んでおり、アジアや欧州各国の留学生が熱心に協働し議論する様子は、建築教育のグローバル化を実感させるものであった。いずれの課題でも、フランス人の学生たちには、構造・設備・空間を斬新な方法で総合しようとする姿勢が見られ、他国の学生たちにも強い刺激を与えた。筆者も英語の講義「Contextual Design for Villages and Cities」と「Environment Behavior Studies」を提供し、日欧を超えた集落・都市の普遍的な空間形成原理や計画論、環境心理・環境行動からみた建築デザイン論を解説した。そもそも、19世紀末と20世紀半ばの2度にわたって世界に飛び火した「都市の文脈を尊重する知的運動」は、元はと言えばオースマンのパリ大改造とル・コルビュジェによるパリ・ヴォワザン計画への抵抗がきっかけであり、こういった解釈をパリから来た学生と議論することは、とても刺激的な巡り合わせである。また、2年前より地球総合工学専攻による英語コース「海洋・都市基盤工学グローバルリーダー育成特別プログラム」が発足しており、建築・都市工学関連の英語科目がかなり充実してきたことも、近年のパリからの留学生の増加につながっているであろう。

フランス人3名のうち、本研究室に配属されたマザール・クレールさんは研究にも熱心に取り組んだ。欧州は移民問題に揺れており、パリ市は都市公園に移民用の仮設住宅を建設する構想を打ち出している。クレールさんは卒業論文で仮設住宅の開発に取り組み、自国やパリ市に貢献したいとのことであった。当研究室はハイブリッド仮設住宅開発プロジェクトや東北の被災地調査、和歌山県における事前復興計画を進めていたため、クレールさん、下田元毅助教、日本人学生とチームをつくり、東北や和歌山への調査に出かけた(写真2)。仮設住宅の開発・供給に大切なことは、構法・構造などの技術に加え、生活環境を持続するためのコミュニティ形成の支援、建設用地の事前の計画、「仮設の本設化」による理想の都市像の実現など、現代から将来へのまちづくりの役割を担っているのだと理解したことが彼女の大きな収穫であった。また、日本では仮設住宅供給の法律やしきみについて、フランスでは想像できないほどの努力と経験の蓄積があることも彼女の強い興味を引いた。一方、当研究室のメンバーも、クレールさんとの協働作業を通して、欧州における移民問



写真2 宮城県女川町仮設住宅団地のイベントに参加
(テーブルに向かって左がクレールさん)

題、フランスにおける仮設建築の技術、建築家の社会との向き合い方など、様々な知識やアイデアを得ることができた。

フランスと日本は、建築デザインとまちづくりにおいて、様々な課題や葛藤をかかえているからこそ、世界でも最先端を行く地域であり、両者の交流から非常に多くの気づきや刺激を得ることができている。今シーズンも新たに3名のフランス人学生を受け入れ、活動が始まったところである。

3. パリ・ラヴィレット建築学校における活動報告 (中前佐和子)

私は、2015年8月から2016年8月までフランス・パリに留学し、パリ・ラヴィレット建築学校に通った。パリ・ラヴィレット建築学校では、設計の授業、アートの授業、表現方法を学ぶ授業、ツールを学ぶ授業、ワークショップなど様々な授業があり、どれも興味深いものばかりであった。また、設計の授業は約20種類あり、舞台、難民のためのキャンプ施設、美術館を設計する授業や景観の授業、インドでのワークショップ型の授業など様々で、自分の興味を持ったものを選ぶことができる。

私は第一セメスターでは、設計の授業、動画の表現方法を学ぶ授業、アートの授業、学校内でオブジェをつくるワークショップの授業を受けた。設計の授業としては景観の授業を選び、建築家とスカルプチャーアーティスト、哲学の先生に指導していただいた。パリの郊外でまず“banal but interesting”な(日常だけど、面白い)写真を撮り、それから写真のコンセプトモデルをつくり、敷地なしの建築を

設計した。すべてが初めてのことで常に難しさを感じた。先生方に「あなたの写真は興味深くない」と言われ続け、何度も写真を撮りにいき指導していただき、やっと興味深いプロポーションがきれいな写真を発表することができた。その後、コンセプトモデルを作製し、学内で展示されることとなった。私の写真のコンセプトをどのようにモデルで表現すればいいのか悩み、見た人がすぐに理解できるものを目指し作製した(写真3、4)。建築を設計にするにあたっては、「敷地なしの建築??」をどう考えればよいのか戸惑ったが、先生方に私のコンセプトをどう建築に置き換えられるか指導していただき、建築を設計することができた。この授業を受け建築に対する見方が変わったと同時に、造形、マテリアルを学び、また展示方法、表現方法、デザインに関わることすべてを学ぶことができた。他に、アートの授業では、空港の空間を学ぶというテーマで、空港からイメージされるものをスケッチし、ベルリンに行き動画を撮り、それからコンセプトを基に空港の動画を作った。どう感じているのかを様々な形でアウトプットする授業で、とても刺激的であった。

第二セメスターでは、設計の授業として公共施設の設計に取り組んだ。パリにある、現在は公園の場所で、屋外テアトルと音楽学校、オーディトリウム

を設計した。敷地条件が難しくまた、音楽学校が日本の文化にはない施設タイプなのでイメージすることがとても難しかった。驚いたのは授業の形式について毎回の授業ごとにプランを詰めていくのではなく、毎回、図面模型を完成させ発表するということがあった。毎回の発表のために徹夜を繰り返すこととなった。発表ではフランス語があまりうまく話せず、先生方に私の案を説明するのが難しくとても苦労した。友達に発表のために何度もフランス語を教えてもらい、また先生方に伝わるようにプラン以外にもスケッチを作製した。先生方には、「あなたはジオメトリーが分かっていない」と言われ続けた。私はジオメトリーとは何か全くわかっておらず、建築の基礎が理解できていないのではないかと悩んだ。ジオメトリーとは、幾何学という意味で建築におけるプロポーションであったり、空間そのもので、植物も全てジオメトリーでできている。そのことを、授業の回を追うごとに、私のプランの訂正をしていただく中で学ぶことができた。最後の発表では、「まだあなたのジオメトリーは強くない」と言われたが、当初と比べ成長したと実感できた。この授業を最後までやり抜き、自分の納得のいくものを発表できたことがとてもうれしかった。

フランス・パリに留学をして文化の違いを学び、

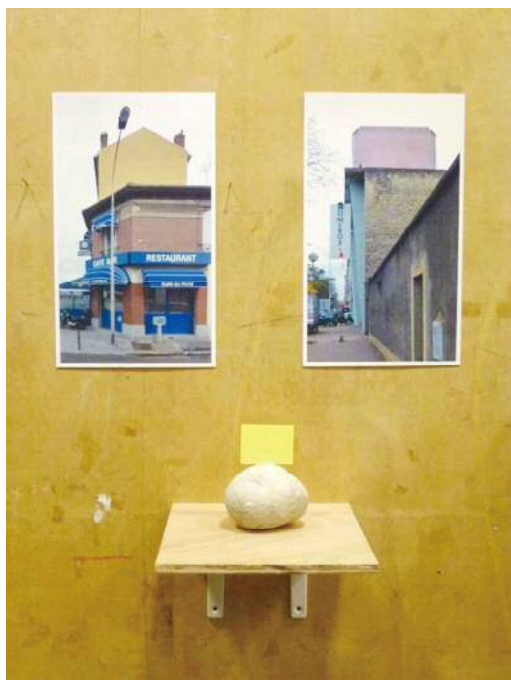


写真3 プロジェの作品展示



写真4 作品講評の様子